

このコメンタリーの5月20日号で取り上げた田中徳三『鯨神』（1962）について、偶々手元にあった「ヒッチコックマガジン」の1962年10月号に佐藤忠男氏の「三本立てファン映画教室 - 日本映画月評 -」という連載記事の中で取り上げられていたので、抜粋しておきます。「大映、田中徳三監督の『鯨神』は、どうせジョン・ヒューストンの『白鯨』みたいにゆきっこない、とタカをくくっていたが、あに計らんや、傑作であった。（中略）漁村の人間がみなポリネシアの原住民か何かみたい（中略）日本ばなれもここまで来れば天晴れなもので」と大変好意的な扱いを受けていることに正直驚きました。また、藤村志保のことを「ゲテものになりかねないこのスペクタクルに、一種堂々とした風格を持たせる作用をしているのだから、これも立派」としています。少し横道に逸れますが、この号の「ヒッチコックマガジン」には、長編読み切りハードボイルドとしてレイモンド・チャンドラーの「赤い風」が「フィリップ・マーロウ物未訳の傑作登場！」として登場、また執筆陣には、江藤淳、荻昌弘、双葉十三郎、品田雄吉、伊原高忠、虫明亜呂無、田中小実昌が、「GUN相談室」を大藪春彦が担当していたりと何とも時代を感じ懐かしく、また贅沢なのです。編集長は中原弓彦こと小林信彦です。

■早川千絵『ナイアガラ』（2014）

27分という短編作品です。特殊な事情が冒頭部から提示されます。18歳になり保護施設から出て生活することになった”やまめ”という女の子が主人公です。施設から出るとき、彼女は交通事故で亡くなったとされていた両親の死が、実は祖父による殺人であったことを知らされます。しかも、”やまめ”本人、そしてこれから一緒に生活する祖母も重傷を負ったという経緯もあります。”やまめ”の記憶からそのことは消えてしまっています。祖母の認知症はかなり進んでいて、介護を担当する青年の話では来月には施設に入所する予定になっていました。また、この介護に当たっている青年は、甲斐甲斐しく祖母の世話はするものの、勝手にその家に住み込んでいました。”やまめ”はこの青年から街の中や自然の中の音を録ることの楽しみを教えられ、簡易な録音機材を持って歩き回ります。夏のある日、三人は花火大会に向かいます。そして、「ナイアガラ」の花火が見事に打ち上がります。長時間の外出で失禁してしまった恥ずかしさより、祖母は何よりもその美しさに感動したようです。

この短い時間にまとめられた作品の中には、いくつものプロットが現れます。一つ一つプロットを発展させ本編に発展させることも十分可能だと思わせます。早川千絵の揺るがぬ視点からの社会観察そして何よりもそのイマジネーションの豊かさに驚くべきものを感じるのです。映画作家にとって最も重要な要素を才能として持ち合わせているという強みを具えています。ニューヨークのスクール・オブ・ヴィジュアルアーツに留学した後、子育てやWOWOW勤務を経て、改めて三十代半ばで映画学校に通いゼミの卒業制作作品として出来上がったのが本作です。ぴあフィルムフェスティバルのグランプリ、カンヌ映画祭シネフォンダシオン部門入選という結果は、早川に新たな扉を開けることになりました。

早川は映画を撮りたいと思ったきっかけを、「小学校の頃『泥の川』（1981年 小栗康平監督作品）を観て感銘を受けたことです。私が子供ながらに日々感じていた言語化できない感情が描かれていて、映画を作った人は私の気持ちをわかってくれていると思ったんです。もっとそういう映画や小説に出会いたくて、たくさん映画を観たり、小説を読んだりするようになりました」とあります。この「言語化できない感情」を描くことに対して、貪欲にまでなれるところに早川千絵の創造の源泉が感じられるのです。筆者は『PLAN75』（2022）では、その終盤に不満を覚えたのですが、新作『ルノワール』の公開が待ち望まれます。

■ アニエス・ヴァルダ『創造物』（1966）

アニエス・ヴァルダ（1928-2019）は、フランス映画界のあのヌーヴェル・ヴァーグを代表する映画作家の一人ですが、そのヌーヴェル・ヴァーグでも「左岸派」に属しました。セーヌ川の左岸、モンパルナス界隈に集まった映画人たちで、アラン・レネ、ジャック・ドゥミ（アニエス・ヴァルダの夫）、クリス・マルケルといった人たちです。一方「右岸派」は、別名「カイエ派」であり、「カイエ・デュ・シネマ」誌の事務所が右岸にあったことからそのように言われました。ジャン＝リュク・ゴダール。フランソワ・トリュフォ、クロード・シャブロール、ジャック・リヴェット、エリック・ロメールといった映画作家たちです。この「右岸派」と「左岸派」には思想的な右翼・左翼を表す意味合いはありません。

さて、ヴァルダは写真家として芸術活動を始め、1955年『ラ・ポワント・クールト』で映画監督デビューします。（編集はアラン・レネ）そして『5時から7時までのクレオ』（1961）『幸福』（1965）を経て長編作品6作目にこの『創造物』を発表します。英語でのタイトルは『The Creatures』です。「クリーチャーズ」の直訳です。ヴァルダのオリジナルシナリオ作品ですが、それまでのヴァルダの作品そして以降の作品にも見られない一種独特の不思議さとサイコ的、ホラー的要素が含まれ、映像のかなりの高水準の合成技術と相俟って特異性が際立ちます。しかも、カトリーヌ・ドヌーヴとミシェル・ピッコリ主演という組み合わせです。

交通事故が原因で一時的に言葉を失った妻のドヌーヴ、そして夫のピッコリは静かな島の村の砦のような邸宅に暮らします。ピッコリは作家で新作に取り掛かっているところです。そんな平穏な島の中で、一連の出来事、事件といった方が良いでしょうが起こり、その原因は人々を暴力行為や犯罪行為に駆り立てる不思議な金属片にあり、それを密かに流通させる人物がいるのです。ピッコリはその人物を探し当て、ゲームという形式で戦いを挑み、村の平穏さを取り戻そうとします。まるでチェスカ何かのように、村人を駒として扱い自在に操りながらその運命を翻弄するのをピッコリは止まらせようとするのです。実に奇妙なストーリーが展開されます。そして、ラストではドヌーヴに男の子が生まれます。これこそが「創造物」ということになるのでしょうか。暴力行為や犯罪行為にのめり込むことになってしまう人間の原始の姿を表現しているのではないかということ、またはそうしたこうした行為に及ぶのは、あたかも遠隔操作のように外部からの働きかけが原因なのか、いずれにせよ不安の時代を表現したものであり、そこには人間の殺伐とした空気と孤独に満ちた内面的な残忍性が共存する恐怖でもあるのです。『幸福』での柔らかな光の中での一家の幸福と突然現れる不幸の描写とは一転して異なり、そこには深く静謐な人間の内面的な苦悩が表出します。しかし、表現方法だけが異なるだけで、ヴァルダとしては、『幸福』で描ききれなかった部分をここで表したのではないかとも思えてしまいます。

本作は、1966年に公開されましたが、日本では1992年に英語字幕で二回上映されたらしいのですが、通常興行もソフト化も行われいないという、ヴァルダ作品としてはある意味不幸な作品でもあります。